

筑波大学社会・国際学群国際総合学類

卒業論文

スポーツと地域文化

ーザンビアにおけるプロサッカーの事例からー

2020 年 1 月

氏 名：森下仁道

学籍番号：201510412

指導教員：関根久雄

目次

第1章 序論	1
1. 研究の背景と目的	1
2. 研究方法	3
3. 調査地の概況	3
第2章 ザンビア共和国について	6
1. ザンビアの歴史	6
(1)独立前	6
(2)独立後	8
(3)ザンビアと中国	9
2. ザンビアの宗教	14
(1)ザンビアの宗教の概況	14
(2)アフリカの伝統宗教	16
第3章 ザンビアのサッカー	19
1. アフリカにおけるサッカーの歴史	19
2. アフリカのプロサッカーの現状	17
(1)「U-20 サッカーアフリカカップ」決勝、ザンビア対セネガル、2017年3月12日)	18
(2)「ルワンダプレミアリーグ」、ムクラ対レイヨン・スポーツ、2016年12月16日	19
3. ザンビアサッカーの概況	23
(1)事例1	25
(2)事例2	25
4. Zambia Super League について	26

第4章 事例	27
1. フィールドの紹介	27
2. 宗教観に関する事例	29
3. 人種観に関する事例	34
(1) ザンビア人と「白人」	34
(2) ザンビア人と「中国人」	35
(3) ザンビア人と「アジア人」	37
第5章 結論	38
1. 考察	38
2. 課題と今後の展望	39
参考文献	43
注	46
Summary	48
謝辞	49

図目次

図 1	ザンビアの地図	5
図 2	ザンビアの宗教比(2010)	13
図 3	試合中に投げ込まれたもの	19
図 4	FW カマラが何らかの物体を刺している様子	20
図 5	チケットを購入せずにサッカーの試合を観戦するザンビア人サポーター	21
図 6	練習前の儀式	22
図 7	試合開始前の儀式	23
図 8	2019 年 8 月以前と以降のザンビアサッカーの構図	24
図 9	FC MUZA のメンバー	28
図 10	「聖なる油」を試合前にかけてあう様子	31
図 11	「恥と罪悪感の自己制御機能モデル」	38

表目次

表 1	中国の対アフリカ直接投資	11
表 2	2019 年移行シーズングループ別順位表	26
表 3	FC MUZA 2019 年シーズン結果	28

第 1 章 序論

1. 研究の背景と目的

2001 年から 2015 年の間、国内総生産 GDP の成長率が最も高かった上位 10 カ国中に、アフリカの国が半分以上も占める驚きのニュースが世界中に報道された。⁽¹⁾アフリカは貧困地域、経済援助対象地域から一転し、世界経済発展を牽引しうる地域になる可能性を示したのである。2013 年 6 月横浜で開催された第 5 回目アフリカ開発会議(TICAD)⁽²⁾で「援助から投資へ」と謳われたのはこのような状況を反映してのことである。

しかしこの急成長は、「資源開発や関連のインフラ投資を反映したものであって、資源開発を支えた中国やインドからの投資にかげりが出るとたちまちのうちに失速した」[上田、島田 2017]。2015 年以降、サブサハラ諸国の成長率は新興国全体のそれを下回っており⁽³⁾、脆弱性を孕む成長であった。

成長率が低下したとはいえ、アフリカに今後も経済成長の期待がかかっていることには変わらない。現在アフリカ大陸の人口は約 12 億 5600 万人(2018 年)であり、これが国際連合の推計では 2050 年には 25 億万人に倍増し、世界の 4 人に 1 人はアフリカ人になるという。この凄まじい人口増加が経済に与えるインパクトは計り知れない。

当然、開発による課題も多く存在する。これまでにないスピードで進められる開発政策は、アフリカ諸国で所得格差増大や土地問題を引き起こしている。これらの課題に対する対応を誤ると、政治的混乱や紛争が起き、直接世界経済に影響を与えることになる[上田、島田 2017]。

それを未然に防ぐためにも開発計画の段階で開発対象地域の文化的背景を十分に理解することが重要である[植竹 2016:27]。現地の住民の視点を取り入れ、現地の文化を統合した開発を進めることが開発による摩擦を抑える解決策となりうる。

そこで本研究では、社会を映す鏡ともいわれるスポーツに映し出されている、現地社会の文化について調査した。Vidacs(2006)によると、アフリカにおけるスポーツ分野の研究蓄積は他地域に比べて乏しい。その中でも開発に関する研究が多く、プロ

スポーツの実態を選手の視点から明らかにしている研究は管見の限りではほとんど確認されない。

筆者は 2019 年 1 月から同年 5 月、南部アフリカ、ザンビア共和国（以下ザンビア）のプロサッカーリーグ「Zambia Super League」に所属するサッカーチーム「FC Maestro United Zambia」（以下 FC MUZA）と 1 シーズンのプロ契約を締結し、ザンビアでプロサッカー選手として活動した。アフリカサッカー連盟(CAF)が集計しているアフリカ国内リーグのランキングにおいて「Zambia Super League」は 56 リーグの中で 8 位(2019 年)に位置している。また国際サッカー連盟(FIFA)が発表する FIFA ランキングにおいてザンビア代表チームは 81 位(2018 年)に位置しており、当国はアフリカの中では「サッカー先進国」と分類できる。

実際に当リーグでプレーしている多くの選手が「ザンビアはアフリカで最もレベルが高く、環境が整っている国の一つであり、多くのアフリカ人選手がザンビアへの移籍を望んでいる」と述べている。しかし、当リーグで契約を結んでいるアフリカ大陸外の国籍の選手、言い換えると「非黒人選手」は 2019 年 6 月時点で筆者を合わせて 2 人しかおらず、過去に所属していた選手も数名しか存在しない。

筆者は当リーグに所属している FC MUZA で史上初かつ唯一の「非黒人選手」としてサッカーをすることを通して、ザンビアの文化を体験した。「中国人みたい」

「Mzungu(≡白人)」と肌の色や人種を理由に不当な扱いを受けたり、「Juju(≡呪術)」という超自然的な力を行使する現地の伝統宗教を目の当たりにした。欧米諸国のプロサッカーリーグでは確認することができない、ザンビアサッカー特有の実態を目の当たりにし、カルチャーショックを受けた。その中でも印象に残ったエピソードを整理すると「宗教観」と「人種観」の 2 つのキーワードに分類できる。筆者はこれらの事象を引き起こしている要因はザンビアの歴史的・政治的な背景以外に、ザンビア人とプロサッカーを通してつながり、同じ釜の飯を食べることで、共通して存在する感情があると感じた。

そこで本稿は、第 2 章でザンビアの基本的な情報を入植の歴史と宗教の観点から整理し、第 3 章でザンビアのプロサッカーリーグについての実態をアフリカにおけるスポーツの伝来の歴史的背景からまとめる。第 4 章ではフィールドワークで得られたデータを事例として提示し、最後に第 5 章でそこに影響を与えている要因について歴

史的・政治的背景より考察し、ザンビア人の文化的な価値観を筆者が体験したエピソードから感情に注目しながら明らかにする。

本研究は、研究蓄積の乏しいザンビアのプロサッカーの実態を明らかにし、ザンビア文化の一端を示すことを目的とする。そして今後ますます進むアフリカ、とりわけザンビアの国際開発を推し進めていく上で現地に根差す文化理解の一助となれば幸いである。

2. 研究方法

本研究は文献調査とフィールドワークを用いてデータの収集を行った。文献調査ではアフリカとりわけザンビアの歴史、宗教やスポーツに関する理論的研究や事例などの先行研究をまとめ、本研究の文脈に沿ってレビューした。

またフィールドワークでは、ザンビアトップリーグ「Zambian Super League」に所属する「FC Maestro United Zambia (FC MUZA)」を対象事例として実施した。滞在は、サッカー選手という立場で行った。「FC MUZA」内部とチームが位置するザンビアを主なフィールドとして、チームメイト、スタッフ、サッカー関係者へのインタビューや参与観察などを実施した。なお、話が現地語で行われた場合は、チームメイトに英語で通訳をしてもらって解釈した。

3. 調査地の概況

ザンビアは、1964年に英国から独立した、アフリカ南部に位置する共和国である。

ザンビアは南緯 8° から 18°、東経 22° から 34° に位置し、北にコンゴ民主共和国、北東にタンザニア、東にマラウイ、南にモザンビーク、ジンバブエ、ボツワナとナミビア、そして西にアンゴラと隣接している。面積は 752.61 千平方キロメートルで日本の約 2 倍、人口は 1,735 万人(The World Bank Group 2018)で日本の約 10 分の 1 である。したがって、人口密度は日本の約 20 分の 1 である。ザンビアは中央州 (Central)、カッパーベルト州 (Copperbelt)、東部州 (Eastern)、ルアプラ州 (Luapula)、ルサカ州 (Lusaka)、北部州 (Northern)、北西州 (North-Western)、南部州 (Southern)、西部州 (Western)、ムチンガ州 (Muchinga) の 10 つの州 (Province)から構成されており、最大の都市は首都のルサカである (図 1)。

2010 年のザンビア国勢調査によるとザンビア国内で最も多い上位 3 つの民族 (Ethnicity) はベンバ系(Bemba) 21.0%、トンガ系(Tonga)13.6%、チェワ系(Chewa) 7.4% であり、この他にも 70 以上の部族が存在する。これに対応して言語は、ベンバ語 (Chibemba)41%、トンガ語(Chitonga)14.5%、ニャンジャ語(Chinyanja)23.3%が主要の部族語(Tribe language)とされ、言語もその他多数存在する⁽⁴⁾。英語が公用語とされているが、ある程度の教育を受けた者しか英語を使うことができないのが現状である。宗教は、主としてキリスト教であるが、その他の伝統宗教も多数存在する。ザンビア経済の主力は鉱業であり、世界第 7 位の産出量があり総輸出額の約 74.3%(2013 年)を占める銅の輸出に頼る典型的な単一輸出経済である⁽⁵⁾。特に銅山の密集する北部地域はカッパーベルト州と名付けられ、現在最もザンビアで都市化が進んでいる地域である。

筆者が現地調査を主におこなったのは、ザンビア南部(Southern Province)のマザブカ(Mazabuka)においてである。マザブカは南緯 15° 49 から 15° 53、東経 27° 42 から 27° 47 に位置し、海拔 1000m 以上の高原面を主体とする。首都ルサカからリビングストン行きの鉄道の間にある、ザンビア南部に位置する町である。2019 年 7 月 1 日時点で人口 194,653 人(City Population Website 集計)を擁し、アフリカでも有数のサトウキビ農業で町が栄えている。住民によると、古来トンガ族がマゴエ川を渡って移住したことから、町の名前にもなっている「マザブカ」は「川を渡る」を意味するトンガ語の"Twazabuka" または"Kuzabuka"に由来するという。

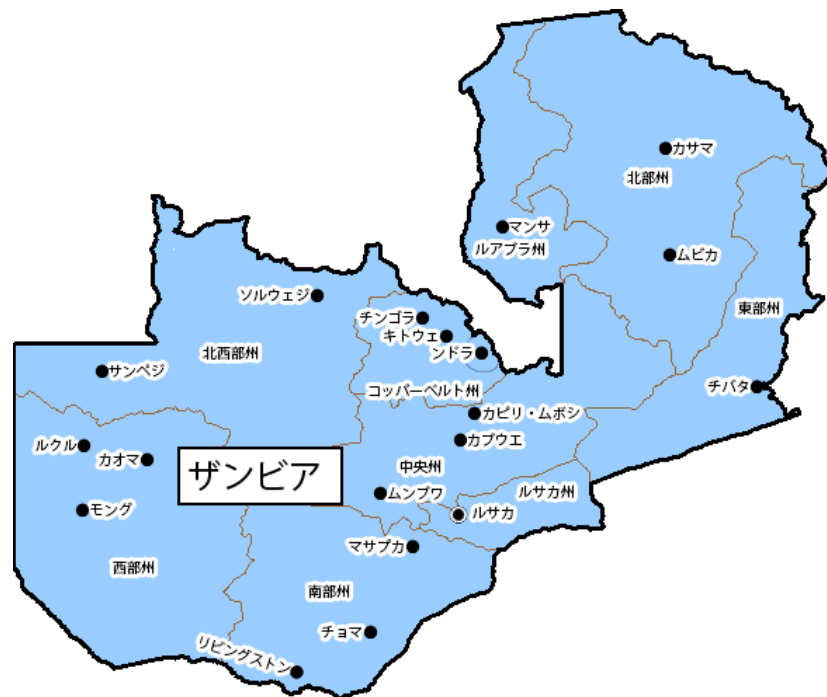


図 1 ザンビアの地図

出所：外務省ホームページより

筆者が現地調査を主におこなったのは、ザンビア南部(Southern Province)のマザブカ(Mazabuka)においてである。マザブカは首都ルサカからリビングストン行きの鉄道の間にある、ザンビア南部に位置する町である。調査地は南緯 15° 49 から 15° 53、東経 27° 42 から 27° 47 に位置し、海拔 1000m 以上の高原面を主体とする。2019 年 7 月 1 日時点で人口 194,653 人(City Population Website 集計)を擁し、アフリカでも有数のサトウキビ農業で町が栄えている。古来トンガ族がマゴエ川を渡って移住したことから、町の名前にもなっている「マザブカ」は「川を渡る」を意味するトンガ語の"Twazabuka" または"Kuzabuka"に由来するという。

調査対象は 2019 年 6 月まで Zambia Super League に所属していた FC MUZA である。

現地調査は参与観察を中心に 2018 年 12 月から 2019 年 5 月にかけて 6 ヶ月間おこなった。

第2章 ザンビア共和国について

本章ではザンビアの歴史と宗教の観点から理解を深める。まずザンビアの入植の歴史を独立前、独立後の枠組みから整理し、現代のザンビア政治の実態を主に中国との関係性に着目しながら理解する。次にザンビアの宗教について歴史的背景から概観し、その中でもアフリカ特有の伝統宗教についてまとめることでアフリカ、とりわけザンビア人の宗教観について知見を深める。

1. ザンビアの歴史

(1) 独立前

8～12世紀ころバントゥー語系住民が北から南に移住し、原住民ブッシュマンを追い出して農耕、牧畜を始めた。1000年ころにはトンガ・イラ文化がザンベジ川渓谷沿いに栄えた。17世紀にはコンゴ地方からロジ族、南方からベンバ族が来住し、それぞれ中央集権的な王国を建設した。

1798年にこの土地に進出していたポルトガルは、1830年代から大西洋岸のアンゴラ植民地とインド洋岸のモザンビークを結ぶことを目指して、内陸のザンビアへの探検を本格化させ、多くの探検家がこの地を訪れた。19世紀半ばにはイギリスもこの地への関心を深め、1855年にこの地を訪れた探検家にして宣教師でもあったデイビッド・リビングストン(David Livingstone)が、「モーシ・オワ・トゥーニャ(Mosi-oa-Tunya)」の滝をヨーロッパ人として初めて発見し、当時のイギリスのヴィクトリア女王の名に因んで「ヴィクトリアの滝(Victoria Falls)」と名付けた⁽⁶⁾。

19世紀末C.ローズのイギリス南アフリカ会社は南アフリカからさらに北方への進出を企て、リンポポ川以北のマタベレランド、マショナランド、マニカランドを手に入れ、南ローデシア(現在のジンバブウェ)をつくった。つづいて1890年にザンベジ川上流域のロジ王国のレワニカ王から鉱山採掘権を入手し、さらに北方のベンバ族を強敵ンゴニ族から守るという名目で1899年にはほぼ現在のザンビア(北ローデシア)全域を手に入れた。アフリカ分割に関して衝突していたポルトガルに対して1890年に最後通告を出し、現在のザンビアとジンバブエとマラウイに相当する地域

に展開していたポルトガル軍を撤収させ、該当地域の植民地化を決定的なものとした[金七 2003:190]。しかし会社の関心は鉱産資源の多い南ローデシアに集中し、北ローデシアへの白人の入植は遅れた。

1898年6月25日に初のヨーロッパ人移民があった後、1900年にバロツェランド・北西ローデシア立法審議会が開かれ、この地はイギリスの保護領となったが、在地のレワニカ王はその後も一定の権力を保ち、レワニカ王は1906年にバロツェランドの奴隷制を廃止した[星 1988:108]。その後20世紀初頭には、ツェツェ蠅が多く、農業に適していなかったこの北ローデシアの地へのヨーロッパ人入植は進まず、鉄道も建設されなかった[林、星 1988:123-124]。

1920年代の初め、会社の独占的支配に対する白人入植者の反感が高まり、住民投票の結果、24年会社の南・北ローデシア支配は終わり、北ローデシアはイギリスの植民地省が統治する直轄植民地となった。1920年代末、北ローデシア中部の現ザイールとの国境沿いのコッパー・ベルトで銅の富鉱が発見され、ローン・セレクション・トラスト社(RST、アメリカ系)とアングロ・アメリカン社(AAC、南アフリカ連邦・イギリス系)が開発に乗り出した。

北ローデシアの銅経済は1929年の世界恐慌勃発と1931年11月の銅価格の暴落を乗り切り、その経済的な好調は南ローデシアに居住していた白人入植者の目をこの地に向けることになった[林、星 1988:155-157]。

イギリス領ニヤサランド(現在のマラウイ)のアフリカ人労働力と合わせて3植民地で連邦を結成することを図り、イギリスとアフリカ人の反対を押し切って1953年にローデシア・ニヤサランド連邦を結成し連邦初代首相にはハギンスが就任した[林、星 1988:197-200]。白人の利益を優先する連邦結成にアフリカ人は反対し、H.シクンブラがアフリカ人民族評議会(ANC)を結成、カウンダもこれに参加した。

急進的なカウンダは1958年脱党し新党をつくったが、非合法化され投獄された。1959年釈放されたカウンダは統一民族独立党(UNIP)の党首となり、連邦反対と独立を要求してイギリス政府と交渉した。1956年に第二代連邦首相に就任したロイ・ウェレンスキーの統治を経てローデシア・ニヤサランド連邦では葉タバコ生産やカリバ水力発電ダムの電力による工業化が急速に進んだが、連邦の経済政策が白人入植者の集中していた南ローデシアを優先する方針を連邦の経済政策が白人入植者の集中していた南ローデシアを優先する方針を取ったために黒人民族主義者の反発を招い

て 1963 年末ローデシア・ニヤサランド連邦は崩壊し、翌 1964 年 7 月にニヤサランドはバンダ首相の下でマラウイとして独立を達成、北ローデシアも在地のロツィ族の王ムワナウイナ 3 世によるバロツェランドの分離独立運動を制した北ローデシア植民地政府首相のケネス・カウンダと統一民族独立党により、北ローデシアは 1964 年 10 月 24 日イギリスから独立してザンビア共和国となった。

(2)独立後

独立後直後に国際連合に加盟したザンビアは、国連の経済制裁決議に従ってアパルトヘイトを敷いていた南アフリカ共和国との経済関係を断ち、さらに 1965 年にローデシアがイアン・スミス首相の下で一方的独立宣言を行うと、ローデシアの封鎖にも加わった[林、星 1988:200]。

両国に大きく経済的に依存していたザンビア経済は大打撃を受け、さらに内陸国であったザンビアはそれまで行っていたローデシア鉄道を用いた銅輸出への道を絶たれた。1969 年 8 月にカウンダ政権は外資系銅企業の国有化政策を進め、1970 年 7 月にはタンザニア、中華人民共和国の援助でローデシアを経由しない銅輸出のためのタンザン鉄道の建設が調印された。また、1970 年 2 月にカウンダは国内の部族主義を克服するため、統一民族独立党による一党制を樹立した[林、星 1988:233,235]。

1973 年にカウンダはローデシアとの国境を完全に封鎖し、さらに銅企業の国有化政策を推進した。外交面でカウンダはポルトガルからの独立を目指すモザンビーク解放戦線（FRELIMO）やアンゴラ国民解放戦線（FNLA）を支援しており、1974 年 4 月 25 日にポルトガルでカーネーション革命が勃発し、エスタード・ノーヴォ体制が崩壊すると、9 月に FRELIMO とポルトガル新政府を仲介してルサカ合意を実現させた。

ザンビアは独立以来一貫して銅に依存した経済構造を有しており、政府主導での農業部門の拡大による経済の多角化が唱えられながらも小農の形成は進まなかった。このような経済構造が災いして、1970 年代後半の銅価格低迷はザンビアの経済に大打撃を与え、1980 年代のザンビアは経済的に低迷し続けた[小倉 1995:63-78]。1982 年、*Zambia Consolidated Copper Mines Limited* (ZCCM) に統合されたものの、国民は銅価格の低下に起因するザンビア経済の凋落に不満を爆発させ、1986 年 12 月には暴動が発生する。さらに 1989 年にはカウンダの与党統一民族独立党一党制に対し

て公然と複数政党制を要求する声が挙がり、1990年6月の暴動を経て同1990年7月20日には複数政党制民主主義運動（MMD）が結成された。1991年に複数政党制を導入した選挙で与党 UNIP はフレデリック・チルバ率いる複数政党制民主主義運動（MMD）に敗れ、カウンダ政権は終焉した[小倉 1995:129-143]。

新たに就任したチルバ大統領は経済の自由化を進め、ZCCM を1997年から2000年にかけて8つの事業へ段階的に民営化するなどの改革を行ったが経済は好転せず、汚職が恒常化しクーデターが試みられるなど政治は不安定化した。2002年にMMD からレヴィー・ムワナワサが大統領に就任した。その後ムワナワサ大統領は任期中の2008年に死去し、その後の大統領選でMMD のルピヤ・バンダ大統領代行が当選した⁽⁷⁾。2011年の大統領選には当時の現職のバンダ大統領代行を破ったマイケル・サタ候補が当選し、政権交代が起きたものの、サタ大統領もまた任期中の2014年10月28日にロンドンで死去した。副大統領で白人のガイ・スコットが暫定大統領に就任した⁽⁸⁾ち、与党・愛国戦線のエドガー・ルングが、選挙を経て2015年1月25日に第6代大統領に就任した。

(3) ザンビアと中国

現代のアフリカとりわけ、ザンビアの経済的成長は中国なしには語れないであろう。

世界の国々を経済成長率でみると近年の成長上位国はアフリカに集中している。ハーバード大学経済複雑性指標(Harvard Atlas of Economic Complexity)の2024年までの年率成長予測によると、成長予測の筆頭はインドの7%であるが、それ以外の上位国10カ国中7カ国をアフリカが占めている。また African Economic Outlook による2006年から2014年の平均年間GDP 成長率でもアフリカが上位10カ国中4カ国を占めており、ザンビアは双方の指標で世界トップ10入りしている。この経済成長の大きな要因に新興国、とりわけ中国の経済成長による資源需要の急増と、それと連動して対中資源供給国となったアフリカ各国との貿易投資が拡大している点にある[吉田 2017:121]。

世界の対アフリカ投資はOECD 諸国、つまり先進国からの投資が大半を占めてきたが、2010年ごろから新興国のブラジル、中国、インド、南アフリカ、そしてマレーシア、いわゆる MBICS 諸国の投資量が急増し、次第に新興国による投資がOECD

諸国をしのぐようになっている[Chen, Dollar, Tang 2015]。中でも中国による対アフリカ投資の存在感は大きい。表 1 から見てもわかるように、対ザンビア直接投資は 1980 年より中国のアフリカ投資では非常に重要な地位を占め、アフリカで最大の投資受け入れ国の一つである。さらに 2006 年 11 月の第 3 回中国アフリカ協力フォーラム（FOCAC）北京サミットで中国の胡錦濤・前主席はザンビアを含む 5 箇所の中国アフリカ経済貿易協力区（中ア協力特区）を設置することを発表した[吉田 2017:125]。

多大な経済的な恩恵を受けている現状があるにも関わらず、ザンビアでは特に 2005 年以降反中感情が高まっている。

1998 年、中国の建設会社によって国有鉱山会社 ZCCM の保有するチャンビン銅鉱山は買収され、その後、労働条件の悪化が労使問題化し、特に 2005 年、51 人が死亡した鉱山作業所事故への対応の不手際と、翌年、雇用条件の改善を要求するザンビア人労働者グループに警官が発砲したことをきっかけに反中感情が拡大、国内各地の銅製錬所や中国系企業の職場を中心に反中運動が拡大した[吉田 2010:50]。

このような反中感情に政治的に対応する形で 2006 年 9 月のザンビア大統領選挙では野党愛国戦線のマイケル・サタ候補が、中国企業によるザンビア投資のあり方を選挙キャンペーンでとりあげ支持を集めた。サタ党首は中国企業による投資はザンビア人の利益に繋がらないとして対中国断交を公約に掲げたのである[小倉 1995:192]。

中国アフリカ、とりわけザンビア間の経済関係は 2000 年代に入り急成長したが、2010 年以後中国経済の減速により、明らかにアフリカの資源需要は減少しており、投資意欲は低下している[吉田 2017:129]。そのため両国の関係性がいかに展開するか今後さらに注視する必要がある。

表 1 中国の対アフリカ直接投資

1980 年		1985 年		1990 年		1995 年	
ザンビア	1998	ザンビア	2093	リベリア	2732	ザンビア	3186
リベリア	868	リベリア	1538	ザンビア	2655	アンゴラ	2921
コンゴ民	709	アンゴラ	675	アンゴラ	1025	リベリア	2698
タンザニア	342	コンゴ民	620	コンゴ民	546	タンザニア	620
シエラレオネ	324	タンザニア	386	タンザニア	388	コンゴ民	541
マリ	203	シエラレオネ	312	ニジェール	286	セネガル	374
ニジェール	190	マリ	225	トーゴ	268	モザンビーク	356
トーゴ	176	トーゴ	210	セネガル	258	マリ	342
セネガル	150	ニジェール	206	チャド	250	チャド	331
マラウイ	143	セネガル	188	シエラレオネ	243	ニジェール	327
ガンビア	127	チャド	184	マリ	229	トーゴ	301
チャド	121	マラウイ	180	マラウイ	228	ウガンダ	277
エチオピア	110	ガンビア	127	ガンビア	157	シエラレオネ	242
アンゴラ	61	エチオピア	114	エチオピア	124	マラウイ	230
中央アフリカ	50	スーダン	77	マダガスカル	107	ガンビア	185

2000 年		2005 年		2010 年		2014 年	
アンゴラ	7977	アンゴラ	16336	アンゴラ	16063	モザンビーク	25577
ザンビア	3966	スーダン	6996	スーダン	15786	スーダン	22693
リベリア	3247	ザンビア	5409	タンザニア	9712	赤道ギニア	17250
タンザニア	2781	タンザニア	4439	赤道ギニア	9413	タンザニア	17013
スーダン	1398	赤道ギニア	4124	ザンビア	7433	ザンビア	15009
モザンビーク	1249	リベリア	3788	ウガンダ	5575	ウガンダ	9917
赤道ギニア	1060	チャド	3040	リベリア	4956	コンゴ民	7694
エチオピア	941	エチオピア	2821	モザンビーク	4688	エチオピア	7264
ウガンダ	807	モザンビーク	2659	マダガスカル	4383	リベリア	6569
コンゴ民	617	ウガンダ	2024	エチオピア	4206	マダガスカル	6277
チャド	576	モーリタニア	1608	コンゴ民	3994	モーリタニア	5968
マラウイ	358	コンゴ民	908	チャド	3595	チャド	5518
エリトリア	337	マリ	872	モーリタニア	2372	ニジェール	5133
レソト	330	マラウイ	614	ニジェール	2251	マリ	3109
セネガル	295	ギニア	581	マリ	1964	セネガル	2699

単位：100 万ドル (UNCTADSTAT <http://unctadstat.unctad.org/>)

「世界地誌 アフリカ 2017」より引用

2. ザンビアの宗教

(1) ザンビアの宗教の概況

1996 年の憲法改正は、ザンビアをキリスト教国家と宣言すると同時に、宗教と慣行の自由を規定した。すべての宗教団体は、法律で政府によって登録されることが義務付けられており、すべての申請は、差別なく登録および承認される。ザンビア人の大半はローマカトリック教徒またはプロテスタントのクリスチャンだが、他のキリスト教の宗派や伝統的な宗教的慣行もこの国では一般的である(表 2)。その中でザンビアにおける主要な宗教グループは 4 つに分けて考えられる。

まずプロテスタントのキリスト教である。プロテスタント主義は、19世紀のザンビアの開拓以来、ザンビア人の考え方の中心にある。キリスト教はアフリカの他の地域も探検していたヨーロッパのプロテスタントの宣教師によって19世紀半ばにザンビアにもたらされた[Blaikie 1880]。中央アフリカを探検したデイビッド・リビングストンがザンビアのニアミコロ(Niamikolo)やバンウェウル湖(Lake Bangweulu)周辺でいくつかの宣教所を設立したことがキリスト教の普及のきっかけとなったとされている。今日、プロテスタントのクリスチャンが人口の75%以上を占めている。ザンビアのプロテスタント教会には、長老派教会(Presbyterian Church)、メソジスト教会(Methodist Church)、英国国教会(the Anglican Church)、福音派教会(the Evangelical Church)などがある。これらのプロテスタント教会は、現在も医療サービスの提供や教育活動など、全国での宣教活動を行っている。

次に、ローマカトリックキリスト教である。ローマカトリック教徒はザンビアで最大の単一宗派であり、人口の20%がこの宗教グループに属す。ザンビアのローマカトリック教会は、ローマの教皇が率いる世界的なカトリック教会の一部であり、カトリック教会もザンビアで最も影響力のある宗派である。最初のカトリック宣教団体は1885年にキリスト教に非常に敵対的だったベンバ族の間で設立された。ザンビアはいくつかのカトリック教区に分かれており、それぞれにカトリックの病院と学校が全国に広がっている。3つ目にアニミズム・アフリカ伝統(民俗)宗教である。アフリカの伝統的な宗教は、現地では最も古い宗教であり、霊、創造者、死者、祖先、神聖な場所、そして魔術に対する信仰に焦点を当てている。「特殊な能力を持った治療師や占い師は、アフリカにイスラム教やキリスト教が入ってくる遥か以前から」[ホーキー 2010:283]アフリカ大陸に存在していた。ザンビアのアニミズムとアフリカの民俗宗教の遵守は、人口の3%と推定されている。キリスト教の布教の過程で「彼ら(伝統宗教)を敵視したが、いっぽうでは普及のために彼らの手口を取り入れることもあった」[ホーキー 2010:283]のだ。例えば西洋医学を「対抗呪術」として利用することで、現地の伝統的な「特殊な能力を持った治療師」が治癒できなかった病気や怪我を完治させ、キリストの教えとともに西洋文化の正当性を説いていったのだ。結果としてザンビアでのキリスト教の普及に伴い、伝統的な宗教的信念は首都圏を中心に徐々に衰退している。

最後にイスラムや無神論を唱える少数派である。イスラム教は18世紀にアラブの貿易商人を通じてザンビアに到着した。この国のイスラム教徒は人口の1%未満であり、ザンビア中央部の鉄道沿いで主に生活している。ザンビア人の1%は、宗教を持たないか、国内のどの宗教も信じていない⁽⁹⁾。

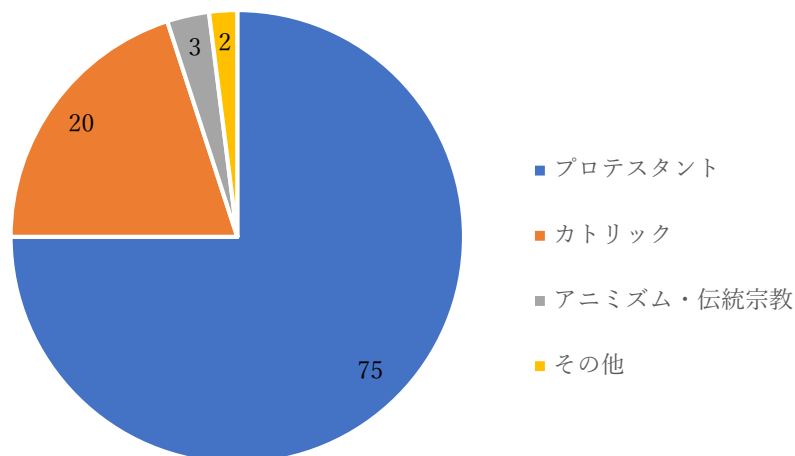


図2 ザンビアの宗教比(2010)

([The World Factbook 2010] より筆者作成)

(2) アフリカの伝統宗教

ザンビアの伝統宗教について詳細に記述できるほどの文献や情報が収集できなかったため、少し広義ではあるが「アフリカの伝統宗教」についてまとめる。

「世界のなかでもアフリカは迷信が盛んだ。未来を見通して神のお告げを述べる神官たちの存在も、各国の民族文化に根づいている。雨や日照り、勝利や敗北の前兆を見抜いて、運命を左右することができる聖なる人々が信仰を集めている。」[ホーキー 2010:283]

アフリカの文化的な大きな特徴として上記でホーキーが示したような信仰がアフリカ全土の民族文化に散見できることがあげられる。

アフリカには西洋の宗教がもたらせられる前より多種多様な伝統宗教が存在しており、米山によるとアフリカは「伝統的に①祖先神、②自然神、③至高神の信仰があ

り、その世界観と結びついてそれぞれの祭祀、儀礼を発達させてきた」[米山 1989: 199-200]。中でも呪術を広く信じ、邪術を用いる者が存在すると信じられている。アフリカでは呪術は豊作や雨をもたらし、病気の治療、災害の回避などを可能にすると思われ、専門家として呪術師（魔術師、witch doctor）が活躍している。

呪術とは、「日常的な技術的手段やコミュニケーション、神々への祈願以外の方法によって、人間や世界に働きかけて一定の変化を生じさせることを目的とする行為」[阿部 1989:200]をいう。呪詛や祝福も呪術の一種とし、呪術の基盤にあるのは神秘的な力の観念であり、呪術は、神秘的な力を発動させ操作する方法である[阿部 1989:200]。アフリカの世界観においては「力の思想」が重要な位置を占めていることとも関連して、呪術はきわめて発達しており、生活の中で重要な役割を果たしている。

アフリカの諸民族は呪術を、社会のために正当に用いられるもの(白魔術、白呪術、White magic)と常に邪悪な目的のために反社会的な仕方で用いられるもの(黒魔術、黒呪術、邪術、witchcraft、Black magic)とに区分する。良い呪術師が行うことは、病気、治療、盗難や事故などの予防、宣誓のための薬を調合すること、そのほか戦勝、就職、逃げた妻を連れ戻すこと、なくなったものを取り戻したり盗人を金縛りにしたりすることなど、ほとんど生活全般にわたっている[阿部 1989:200]。

一方、邪悪な呪術師(黒魔術師、妖術師、witch)が行うことは、正当化されない理由によって他人を不幸にし、滅ぼすことである。心身の病気にしたり、事故にあわせたり、殺したり、家畜や穀物に害を与えたり、家庭に不和を持ち込んだり、さまざまなやり方がある[阿部 1989:200]。そのため、病や死や事故などの災厄は邪悪な呪術のせいとみなされ、原因究明や防御の措置が講じられる。人々は対抗呪術として邪悪な呪術から身を守るために、さらには積極的に多産を実現したり、異性の心を射とめたり、就職したり、昇進したり、敵に危害を加えたりするためにも、金銭等を払って呪術師の助力を求める。

さらに呪術の特徴を阿部は次のようにまとめる。

呪術の基本は、言葉(発語=呪文)と行為と呪物の組合せからなっている。動植物の一部(動物の毛皮、鳥の羽根骨、くちばし、爪など、植物の根、樹皮、木の実など)や鉱物などを、粉にしたり灰にしたりして呪薬として用いる。あるいは、角や皮袋に入

れたり束ねたりして呪具、護符などとして用いる。呪薬は、服用したり、皮膚につけた切傷にすり込んだり、地面につけた溝に埋めたりする。呪物は身に着けたり家屋や生垣のどこかに差し込んだり、部屋に安置したりする。邪悪な呪術師の場合にはさらに、蛇やコウモリなど動物や、墓場から掘り出した人間の死体などを用いる。また、相手の毛髪や爪、足跡の土、身に着けていたもの、相手の似像などを攻撃する。呪薬や呪物のなかには固有名詞をもつ霊力を宿しているものもある。そのようなケースでは呪物と精霊の区別をつけることが困難になる。また呪薬や呪物が呪術師にさまざまな超常的な能力を与える場合もある。その例としては、火の上をやけどしないで歩いたり、刺の上にけがしないで寝ることができる能力、隠されたものを見つけたり未来を予知したりする能力、野生動物に変身したり野生動物や死霊を使役したりする能力などがある〔阿部 1989〕。

アフリカ特有の伝統宗教、とりわけ呪術は現在でもアフリカ各国で存在している。実際、梅屋や佐々木も事例を紹介している。佐々木は西アフリカのカメルーンでエジャガム族には「ンジョム」という「妖術をかけてきた相手や泥棒、犯罪を犯した者（いずれも相手は不明）に対し、呪力によって間接的に害を与えたり、それらから自分の身を守るなど、いわば災因に働きかけるもの」〔佐々木 1995:39〕があり、西洋医学が解決できない妖術に対抗する力が信じられているという。

また、梅屋は「ウガンダ東部のアドラ民族の間でも、ほかのアフリカ諸社会と同じく、病や不幸の原因にはしばしば死霊や悪霊、呪詛、何らかの祟りが関与していると考えられている」〔梅屋 2012:70〕という。その対処法は上記で示したような、霊の専門家である施術師や薬草師に頼るしかない場合もあり、超自然的で神秘的な観念が存在するという。

以上、本章ではザンビアの独立前後の歴史と政治を概観し、ザンビアの宗教およびアフリカ特有の伝統宗教について整理した。

第3章 ザンビアのサッカー

本章ではまずアフリカにサッカーが伝来した歴史とアフリカ諸国のプロサッカーリーグに共通する特徴を先行事例を交えながら紹介する。次にザンビアのプロサッカーリーグの実態について明らかにする。

1. アフリカにおけるサッカーの歴史

ミシガン大学でアフリカの歴史研究をしている Alegi によると、サッカーが初めてアフリカにもたらされたのは 19 世紀半ばのことである。サッカーはヨーロッパ、とりわけイギリスの帝国主義とともにまず南アフリカにもたらされたが、当初はイギリス人の兵士、貿易商人や宣教師によってプレーされていたのだ。アフリカ大陸で行われた記録に残っている最初の試合は、サッカーの公式ルールが体系化される 1 年前の 1862 年に南アフリカで彼らが行なったものである⁽¹⁰⁾。

サハラ以南の植民地支配を受けた地域に西洋スポーツが伝播されたのは 19 世紀後半から 20 世紀初頭のことである。西洋スポーツ、とりわけサッカーの伝播の担い手となったのがキリスト教の伝道団体・宣教師、ヨーロッパ・スタイルの学校教育、軍隊、クラブ組織である。その中でも宣教師は大きな役割を果たした。伝道団体は現地の人びとに対してキリスト教信仰を広めるだけでなく基礎的な教育をほどこすことが多かった。また、本国で伝道団体や宗派（イギリスでいえば主に非国教系プロテスタント）の活動に関心を寄せた者が、植民地にわたって行政官や教育者になることもあった。そうした教育には、いわゆる「読み書きそろばん」だけではなく、スポーツを通じて身体を鍛えたり、規律遵守、チームワーク、自己犠牲などを教え込んだりすることも含まれていた。さらにイギリスからは、パブリックスクールとその卒業生の主要な進学先である大学（オックスフォードやケンブリッジ）で育まれた「アスレティズム」ないし「筋肉的キリスト教」という理念がアフリカにも持ち込まれたことで、現地により急速に西洋スポーツが広まり、受け入れられた⁽¹¹⁾。

アフリカ人は特にサッカーに引き付けられ、自分たちのサッカークラブを組織し始める。この当時組織されたチームが後の各国のサッカー協会の原型となる。実際、

ザンビアサッカー協会の原型は 1929 年にスタートしたとされている。その後、イギリスのサッカー戦術を導入したり、選手たちはサッカーを通して収入源を確保するなどして、サッカーはアフリカで急速に実用化され始める。現地人によるサッカーに関わる集会の場が反植民地主義を説教する機会として使用されることを恐れたヨーロッパ人は独立したチームの活動を制限する⁽¹²⁾。政治的および経済的に弱い立場にあり、様々な制限を受けながらも 1957 年にアフリカサッカー連盟(CAF)が設立⁽¹³⁾。1960 年代に多くのアフリカ諸国の独立が実現したことでアフリカにおけるクラブサッカーが拡大した。多くのアフリカ国内リーグがアフリカサッカー連盟に登録し、現在では 56 のサッカー協会が加盟している⁽¹⁴⁾。

アフリカサッカー連盟が主催する代表的な国際大会としては、1957 年より開催されているナショナルチームによるサッカーの大陸選手権大会「アフリカネイションズカップ」や 1964 年より開催されているアフリカ各国の国内リーグで優勝したクラブがアフリカのクラブ間で競い合う「CAF チャンピオンズリーグ」などがある。

2. アフリカのプロサッカーの現状

Garcia はヨーロッパ諸国、日本やアメリカなどのプロサッカーリーグに所属する選手たちと比較すると、アフリカプロサッカーリーグの選手は「劣悪な労働環境の中を生きている」[Garcia 2018]と述べ、アフリカのサッカーの現状を以下のようにまとめる。

国際プロサッカー選手会 (FIFPro) が 2016 年に 54 カ国の選手の労働組合に対して行った調査によると、年間 72 万ドル (62 万ユーロ) 以上の報酬を得るエリートの類に含まれるサッカー選手は、世界のサッカー労働者の 2% である。その大部分の選手はヨーロッパやペルシャ湾岸地域、中国で活躍している。一方で、21% の選手の月給は 300 ドル (260 ユーロ) 以下である。このような貧しい労働者の多くはアフリカのクラブに所属しているが、これらのクラブの給与額は世界で最も低い。世界規模では調査を受けた選手の 41% が直近 2 シーズン中の給料の遅配に言及しているが、アフリカでのその割合は 55% にのぼる [Garcia 2018]。

実際、筆者がプレーしていた FC MUZA でもほとんどのローカルの選手は月の基本給が 100 ドルの契約で、筆者含め退団までの 3 か月分の給料は未だ受け取っていない。また同リーグに所属する Lusaka Dynamos では、給料の遅配が原因でコンゴ人

選手らが練習をボイコット、さらには国際サッカー連盟(FIFA)に訴えたことで同クラブは2019年シーズンのリーグ戦の勝ち点を6点引かれる処分が下された。このような給与の遅配のほかにも、契約金の不払いやケガと医療に対する責任回避といったことは、アフリカの選手にとっては日常茶飯事である。「アフリカのサハラ砂漠以南では、インフラの面でも組織の面でもプロフェッショナリズムが発達していません」とFIFProのアフリカ支部の事務局長であるステファン・ビュルシュカルテ氏は断言する。[Garcia 2018]

アフリカプロサッカーリーグの文化的側面にも大きな特徴がある。それは宗教との密接な関係である。第2章でアフリカ特有の伝統宗教、とりわけ呪術について記述したが、アフリカでは「サッカーと呪術的实践とは切り離せない—というよりも、非常に密接に絡み合っている」[梅屋 2017: 87]。民族誌的事実としていくつかの事例を紹介する。

(1)「U-20 サッカーアフリカカップ」決勝、ザンビア対セネガル、2017年3月12日)

2017年3月12日の「U-20 サッカーアフリカカップ」決勝でザンビアとセネガルが対戦したときのことである。セネガルのストライカー、イブラヒマ・ヌディアエがソックスから何か(テレビ解説者によるとサッカーの神にまつわるもの)を取り出し、ザンビアが守っているゴールに投げ込んだ(図3)。これに対してザンビアチームは激高。セネガルのムガベ大統領も愛顧するジュジュ(juju)ではないかと言われたが、試合はザンビアが勝利。試合後、ジョセフ・コトヘッドコーチは、「私は呪術を信じていません。もしジュジュが存在するのなら、セネガルが勝利していたことでしょう」。とコメントしている⁽¹⁵⁾。



図3 試合中に投げ込まれたもの

(YouTube より抜粋)

(2)「ルワンダプレミアリーグ」、ムクラ対レイヨン・スポーツ、2016年12月16日

2016年12月16日、ルワンダプレミアリーグ、ムクラ（Mukura）対レイヨン・スポーツ（Rayon Sports）戦。1点を追うレイヨン・スポーツのFWカマラが、相手ゴール左ポスト根元付近に何らかの物体を突き刺す(図4)。これを見た相手GKはカマラが呪術を使ったと考え、激高する。ムクラは複数人でカマラを激しく追い回し、主審は同FWにイエローカードを提示した。しかし、直後にヘディングでカマラの同点ゴールが生まれる。

試合後、ルワンダサッカー協会より呪術を使ったとみなされた選手は10万ルワンダ・フラン（約14,300円）の罰金、所属クラブについては、290万ルワンダ・フラン（約414,000円）の罰金という処遇が決定する。同協会のケイランガ副会長は「厳密に言うと、協会として魔法そのものに対する罰則はない。なぜなら世界のどこにおいても魔法が試合に影響を及ぼしたという証拠はないからだ。ただ、そのような（魔法をかけたとされる）行為が相手チームとの暴力的ないさかいを引き起こすため、罰則を設けることにした」と説明している。

ルワンダのニュースサイト、ニュータイムズ（The New Times）の記者は「呪術など個人的には信じない」という立場を取りつつも、「このような出来事は、アフリカやルワンダのサッカー界において珍しいことではない。私はこの10年ほどの分析

から、スキルや練習よりも呪術の方が素晴らしい試合を作り得る、と信じているコーチや選手もいると確信している」と書いている。



図4 FW カマラが何らかの物体を刺している様子

(YouTube より抜粋)

ホーキーはこのような「アフリカのサッカーには呪物崇拝や魔除けの儀式、イスラム教の聖者崇拝や薬草の使用、その他もろもろの迷信にまつわるエピソードが昔から山ほどあった」[ホーキー 2010:282]と述べ、「聖なる人々」すなわち、呪術師はいまでもアフリカのサッカー界で重宝されているのである。

3. ザンビアサッカーの概況

ザンビアにサッカーがもたらされたのは20世紀初頭のことである。イギリス人によって南部リビングストンで最初に導入され、その人気は瞬く間に広がった。しかし非ヨーロッパ人による参加を厳しく制限され、ザンビア人はサッカーの機会を求めて政府が植民地の他の地域よりも恵まれたスポーツ施設を労働者に提供していたカッパーベルト鉱山の町へ集まった。その結果、ザンビアの才能あるアスリートのほとんどはカッパーベルト地域で育ち、ザンビア二大ビッグクラブとされている Zesco United と Nkana がカッパーベルト地域周辺で設立された。サッカーは現在ではザンビアの国技とされており、重要な国際試合が行われているときは国民全員が観戦する

ため商業施設は営業を停止するほどの人気ぶりである⁽¹⁶⁾(図 5)。1929 年に設立されたザンビアサッカー協会 Football Association of Zambia (通称 FAZ)は 1964 年に国際サッカー連盟 FIFA に加盟し、現在ではアフリカ有数の「サッカー先進国」である。

ザンビア代表チームは 2012 年のアフリカネイションズカップで優勝を経験、2018 年時点でザンビアは FIFA ランキング 81 位に位置しており、アフリカサッカー連盟に加入している国の中ではザンビアのナショナルチームは 17 位である。

一方で過去 5 年間のクラブの国際大会の成績を集計したランキングではザンビア



図 5 チケットを購入せずにサッカーの試合を観戦するザンビア人サポーター
(2019 年 筆者撮影)

のリーグは 7 位である。これはザンビアの国内リーグに能力の高い選手と資本が集まっている証拠であり、実際に当リーグでプレーしている多くの選手が「ザンビアはアフリカで最もレベルが高く、環境が整っている国の一つであり、多くのアフリカ人選手がザンビアへの移籍を望んでいる」と言及している。なお、ザンビアの代表チームと国内リーグの管轄をしている母体はザンビアサッカー協会 Football Association of Zambia (通称 FAZ) である。

ここでザンビアのサッカー文化を事例を交えながら紹介したい。ザンビアのサッカーにも上記で示したようなアフリカ特有の呪術は存在し、伝統宗教との関わりがあるが、キリスト教との密接な関係もある。このことはサッカーのあらゆる場面で観察することができる。

(1)事例 1

練習の開始前、終了後はコーチングスタッフ含めチーム全員で手をつなぎ円陣を組む(図6)。目を閉じ30秒から1分間ほどそれぞれが神に対するお祈りを口にし、最後に”Amen.”と発することで終わる。この行為はアウェイゲームなどで長距離のバス移動をする前や食事をチームとしてとる前にも行われる。



図 6 練習前の儀式

(筆者提供)

(2)事例2

公式戦の前日、選抜メンバーの18人はチームが指定した宿泊施設に前泊する。夕食後には必ずバイブルスタディ(bible study)がチームの選手間で行われる。バイブルスタディとは聖書に書かれてある文脈について議論し信仰を深めることで、チームがあらかじめ招待している場合は牧師が説教をする。FC MUZAは経済的な理由でほとんどの場合は選手が代わり代わりに司会役を担当していた。45分から1時間のバイブルスタディを終えた後、神に祈りを捧げる歌を皆で歌いながら踊る儀式が15分から30分ほど続く。手をたたいてリズムをとるものがいれば、甲高

い声で合いの手を入れたり、大きな音で口笛を鳴らすものもいる。腰を振ったり、腕を上げたり、ステップを踏んだりと各々が自由な形で踊り、場は一瞬にしてディスコ化する。最後に改めて神に対してのお祈りを各々が口にぶつぶつと呟き、そろって”Amen.”と発することで儀式が終了する。この儀式は、例えば試合会場に向かうバスの中や試合開始直前のロッカールーム内などといったほかの場面でも行われ、神に祈りを捧げることで選手がそれぞれ士気を上げ、チームの一体感を高める働きがある(図7)。なおザンビア代表チームの専属牧師によると、このような儀式はFC MUZAだけでなく、ザンビアのトップリーグに所属しているすべてのクラブさらにはザンビア代表チームでも行われており、ザンビアサッカー文化の大きな特徴として捉えることができる。



図7 試合開始前の儀式

(2019年 筆者撮影)

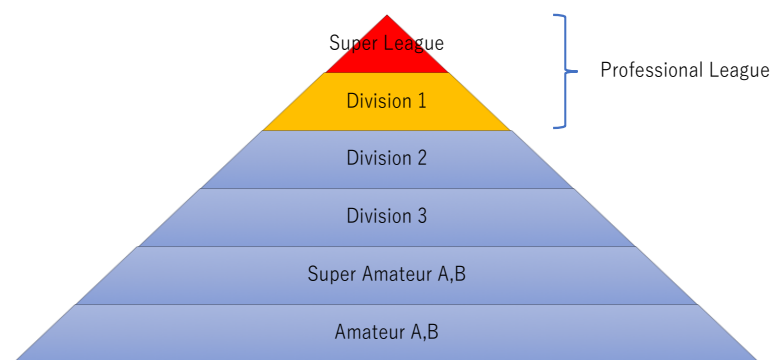
4. Zambia Super League について

「Zambia Super League」は、1962年に創設されたザンビアのサッカーにおける最高位のリーグである。かつてはコンコラ銅山がスポンサーしており、このスポンサー名を冠してコンコラ銅山プレミアリーグ（Konkola Copper Mines Premier League）とも呼ばれていた。現在は南アフリカ共和国はヨハネスブルグに本拠を持つ携帯電話会社のMTNグループがスポンサーしており、スポンサー名に運営を行

うザンビアサッカー協会の略称である FAZ を繋げて MTN/FAZ Super Division とも呼ばれる。

2019 年 6 月までは 20 チームのトップリーグの下に Division1(2 部リーグ)のプロリーグ、Division 2(3 部リーグ)以降のアマチュアリーグで構成されている(図 8)。

~2019/6



2019/8~

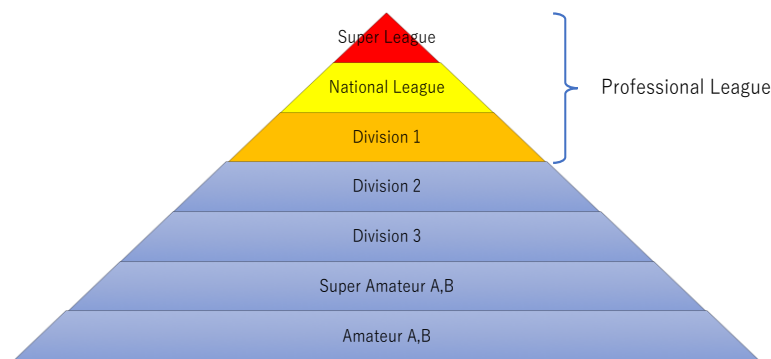


図 8 2019 年 8 月以前と以降のザンビアサッカーの構図
(筆者の聞き取りに基づく)

ザンビアのみならずアフリカのほとんどの国内サッカーリーグは 2018 年までは 3 月始まり 11 月終わりのシーズンカレンダーを採用していた。しかしアフリカサッカー連盟の意向により、ザンビアサッカー協会は 2019 年の新シーズンからザンビアの国内リーグのシーズンを欧州リーグのシーズン(8 月始まり 5 月終わり)を採用することを 2018 年のシーズン終盤に表明した。また同時に、National League を 2 部リー

グとして新設することで国内リーグの再構築を図ると発表した。そのためトップリーグは 2019 年 1 月から 6 月を移行シーズン(Transitional season)として設定し、計 20 チームがグループ A とグループ B に分かれ、それぞれのグループで Home and Away のリーグ戦方式をとった。2019 年の移行シーズンの各グループの順位は表 2 の通りである。

表 2 2019 年移行シーズングループ別順位表

(ザンビアサッカー協会 HP より抜粋)

# ▲	Group A	MP	W	D	L	G	Pts
1.	 ZESCO	18	9	6	3	35:20	33
2.	 Zanaco	18	10	3	5	40:28	33
3.	 Red Arrows	18	9	6	3	25:15	33
4.	 Kabwe	18	7	10	1	22:13	31
5.	 Lusaka Dynamos	18	9	7	2	23:15	<u>28</u>
6.	 Green Buffaloes FC	18	4	8	6	14:16	20
7.	 Mufulira	18	4	6	8	15:27	18
8.	 Nakambala Leopards	18	4	5	9	12:24	17
9.	 Kitwe United	18	2	5	11	14:25	11
10.	 Prison Leopards	18	1	6	11	10:27	9

# ▲	Group B	MP	W	D	L	G	Pts
1.	 Green Eagles	18	10	6	2	22:10	36
2.	 Buildcon	18	8	7	3	21:12	31
3.	 Nkwazi	18	7	8	3	15:12	29
4.	 Forest Rangers	18	7	5	6	27:24	26
5.	 NAPSA Stars	18	5	9	4	21:19	24
6.	 Power Dynamos	18	6	6	6	19:20	24
7.	 Nkana	18	5	8	5	26:27	23
8.	 Lumwana Radiants	18	3	7	8	14:19	16
9.	 Circuit City	18	4	4	10	17:27	16
10.	 FC MUZA	18	2	6	10	8:20	12

第4章 事例

1. フィールドの紹介

本論の調査対象である FC MUZA は弁護士の Keith Mweemba が中心となり、2007 年に首都ルサカにおいて”Manchester United Zambia Academy”として設立されたのが始まりである。Keith がフルスポンサーとなり、設立当初はサッカーアカデミーとして活動していた。2017 年に財政破綻していた Division1（ザンビア 2 部リーグ）のサッカークラブを買収し、同年ルサカからマザブカにクラブの拠点を移した。クラブの拠点を移動した理由として、「私の出身地であるマザブカでサッカーを通じた人格形成と地域貢献がしたい」と Keith は述べていたが、クラブ関係者は「トップリーグへの昇格がルサカの中央エリアより、マザブカの南部エリアの方が競争率が低いから」と述べていた。2018 年シーズンにおいて FC MUZA は Division1 優勝プレーオフを制し、クラブ史上初めて Zambia Super League(ザンビア 1 部リーグ)へ昇格した。トップチーム以外にも Division2(ザンビア 3 部リーグ)に所属する 2 軍、17 歳以下、10 歳以下と女子チームのカテゴリーを有する。筆者が加入した 2019 年シーズンからクラブのネーミングライセンスの問題で”Maestro United Zambia”に名前を変更している。シーズン中は選手計 45 人、監督 1 人、アシスタントコーチ 5 人、マネージャー 3 人、ドライバー 1 人と幹部 6 人がトップチームを構成していた(図)。選手 8 人（日本 1 人、カメルーン 2 人、ナイジェリア 1 人、コンゴ 3 人、ガーナ 1 人）以外は全員ザンビア国籍である。

なお、筆者が所属していた 2019 年の移行シーズンにおいて FC MUZA はグループ B でシーズンを通して 18 試合行い、2 勝 10 敗 6 分、グループ 10 位で終わり、2 部リーグへの降格が決定した。以下の表が全試合の FC MUZA の対戦相手および試合結果である。



図 9 FC MUZA のメンバー

(2019 年 筆者撮影)

表 3 FC MUZA 2019 年シーズン結果

節	日程	対戦相手	スコア	勝敗
1	1 月 27 日	Power Dynamos	0-2	×
2	2 月 2 日	Buildcon	1-1	△
3	2 月 9 日	Green Eagles	0-1	×
4	2 月 16 日	Nkwazi	0-1	×
5	3 月 21 日	Nkana	1-1	△
6	3 月 3 日	Circuit City	1-2	×
7	3 月 9 日	Lumwana Radiants	0-4	×
8	3 月 16 日	NAPSA Stars	1-0	○
9	3 月 27 日	Forest Rangers	0-0	△
10	3 月 30 日	Power Dynamos	0-1	×
11	4 月 6 日	Buildcon	0-1	×
12	4 月 13 日	Green Eagles	0-1	×
13	4 月 20 日	Nkwazi	0-1	×
14	4 月 27 日	Nkana	1-2	×
15	5 月 4 日	Circuit City	0-0	△
16	5 月 11 日	Lumwana Radiants	1-1	△
17	5 月 18 日	NAPSA Stars	0-0	△
18	5 月 26 日	Forest Rangers	2-1	○

([ザンビアサッカー協会 HP]より筆者作成)

2. 宗教観に関する事例

2018年にクラブ史上初めて1部に昇格したFC MUZAは2019年シーズンでは開幕戦から5試合連続で未勝利を記録した。選手に対して月給が払われていない、本来のシーズンより短いイレギュラーな日程、選手登録期間が過ぎているにも関わらず幹部が外部から新しい選手を引っ張り飽和状態になっているなど、チーム内には不穏な空気が漂っていた。

2019年3月4日、開幕戦から5試合目を終えた次の日、14時ごろから選手が練習場に集合した。通常はチームメイトどうしで握手やジョークを交えて挨拶するなど和気藹々とした雰囲気の中で練習を開始するのだが、数人の選手の顔がいつも以上に陰しかった。コーチ陣がまだ到着していない中、不服そうな表情をしていたコンゴ人選手Aが「キャプテン、チームのみんな、聞いてくれ。今俺たちは深刻な状況にある」と唐突に選手全員の前で話出した。

「俺たちのハウス(16)に秩序を乱す奴が一人いる。Bだ。先週はBが家事担当だったにも関わらず、彼は用事があるといってハウスにほとんどいなかった」。

Aのこの主張に対してBは、「地元ルサカの家族に会いに行っていたんだ」と釈明した。それを受け、AおよびBと同じハウスに住むCは、「でも俺はBが村でうろついているのを何度も目撃した」と言い、さらにAが「Bはきっと村で黒魔術師に会いに行っていたに違いない」と言った途端、Bは目の色を変えてKの胸倉を掴み取っ組み合いが始まった。騒いでいる最中にコーチ陣が到着し、二人は引き離された。キャプテンが状況を説明し、監督Dとコーチ4人は真剣な表情で全員に円陣を組んで、話を聞くよう指示した。監督Dは「我々のチームでジュジュ(Juju: 黒魔術、邪術)を使う奴は決して許さない」というメッセージを含む話を45分ほど行い、その後練習を開始した。

練習から帰宅後、筆者のチームメイトでありルームメイトでもあるザンビア人選手Eがジュジュについて教えてくれた。彼によると、ジュジュとは、黒魔術師(witch doctor)にお金と犠牲(=自分の健康、家族の命等)を払い、対象の人物を呪ってもらう行為であり、直接対象に呪いをかける方法以外に、物に呪いをかけ、対象がそれに触れることで呪いがうつる方法などもあるという。

Bは監督Dが前所属チームNAPSA Starsからシーズン開幕直前に連れてきた選手である。NAPSA Starsは今シーズン同じリーグで対戦する相手でもあった。さらに

B は第 3 節以降の試合で毎試合怪我が原因で途中交代していた。怪我を繰り返し、十分に平日のトレーニングに参加できていないにも関わらず、公式戦の先発メンバーに名を連ねていた。怪我が続いている B は黒魔術師に自らの健康を犠牲として払い、チームに負けという結果をもたらしていると疑われていたのである。

B は次の日の練習から顔を出すことはなく、別の地域のチームへ移籍した。しかし FC MUZA は B がチームを去った週のリーグ戦(第 7 節、対 Lumwana Radiants)で敗れた。するとその次の日にクラブオーナー Keith がグラウンドに現れ、選手に対して「君たちは何も心配しなくていい。今日の練習に集中してくれ。君たちがプレーに集中出来る環境を整えるのが私の役目だから」と話し、その週からホペイロ（道具係）を務めていたスタッフがチームから去った。筆者がチームメイトにその理由を聞くと、「あいつも噂によるとチームの備品にジュジュをかけていたらしい。その噂を聞いたオーナーが彼をクビにしたんだ」と話した。明くる日オーナーが外部の牧師を招き、練習前の 1 時間ほどを使って練習場でチーム全体に説教をした。聖書を片手にキリストの教えを説いたあと、"virgin olive oil"と表記された 500ml 瓶を取り出し、「これは聖なる油（anointed oil）だ」と言ってその油をチーム全員の頭に 10ml ほどかけた。牧師は「これで君たちは清められた。ジュジュはもう効果を発揮しない」と述べところ、選手やスタッフは生き返ったような目で牧師を拝めた。筆者は、それまでチーム内にあった不穏な空気が一掃され、チームの一体感が高まったような感覚を覚えた。そしてその週のリーグ戦(第 8 節、対 NAPSA Stars)でチームはシーズン初勝利をおさめた。それ以降、牧師からもらった油が無くなる前期の Nkana 戦(同年 3 月 21 日)まで試合前にそれをかける行為がなされ(図 10)、それまで試合で負けることはなかった。



図 10 「聖なる油」を試合前にかけあう様子

(2019 年 筆者撮影)

3. 人種観に関する事例

(1) ザンビア人と「白人」

2019 年シーズンにおいてチームが不調から抜け出せない状況にあった 4 月初旬のことである。午後のトレーニングの一環として紅白戦が行われた。人数調整の関係でザンビア人コーチ F が筆者と同じチームでプレーすることになった。2 対 2 で迎えたその試合の終盤、カウンター攻撃のチャンスで F は筆者がイメージしていたスペースとは逆の方向にパスし、連携プレーに失敗し、そのまま試合終了のホイッスルが鳴った。その直後に、お互いのプレーのイメージを擦り合せたいと思った筆者は F に歩み寄り、少々興奮気味なトーンで”I wanted the pass on my right because I thought the defense was coming from my left side. Would you share with me what you wanted

to do at the last scene?”(ディフェンダーが左方向より来ていると思ったから右方向にパスが欲しかったのだが、最後のシーンのプレーはどんなイメージだったか共有してくれないか?)と尋ねた。すると F は間髪入れずに、” You think you know more football than us because you are Mzungu?!” (Mzungu(=白人)だからと俺たち(=黒人)よりサッカーを理解していると思っているのか)と更に興奮したトーンと大きな声量で筆者に怒鳴り、ピッチを去っていった。

(2)ザンビア人と「中国人」

筆者がザンビアに渡航し1ヶ月が経過した11月、筆者は受け入れてくれるサッカークラブを見つけるため、筆者はザンビア人のホストファザーに同行してもらい、複数のプロサッカークラブのプレシーズンの練習やトライアウトに参加した。筆者は、2018年シーズンにZambia Super Leagueから2部リーグのDivision1に降格し、プレシーズン中の補強に力を入れていたザンビア議会が所有しているクラブにトライアウト期間の第1週から参加した。60人ほどの練習生・トライアウト生同士で紅白戦を行い、その中から毎日終了時に脱落メンバーが読み上げられ、その都度新しい候補者で補充された。のべ100人以上の選手が最終的に4週間に渡り25人の枠を競い合った。参加者の国籍はザンビアに留まらずコンゴ、ジンバブウェ、タンザニア、ボツワナやカメルーンなどと多様であったが、アフリカ大陸外の国籍を持っていたのは筆者だけであった。トライアウト期間2週目のセッション後、いつも通り監督によって脱落メンバーのリストが読み上げられた。張り詰めた緊張感の中脱落者として名前を読み上げられた選手の中には、泣き崩れる選手もいた。その日のセッションを解散した後、脱落を告げられた23歳のザンビア人のゴールキーパーGが筆者へ歩み寄り、筆者の右手を大きな両手で包みこみ、「僕にはコパーベルトに家族がいる。生まれたばかりの娘もいる。僕はサッカーしかできない。頼むから金をくれ」と、目を見つめながら話しかけてきた。その様子を見ていた同じく脱落したザンビア人選手3人が通りすがりに、「チャイニーズは我々がサッカーをするチャンスまで奪うのか。国へ帰れ!」と吐き捨てた。

トライアウト期間の第4週目が終わった日、チームNのマネージャーが残った30人弱のメンバーに対して、「トライアウト期間は今日までだ。明日からはシーズンに向けてチームとしてトレーニングを開始する。選手登録をするから来週までに全員ナ

ショナル ID（身分証明書）のコピーを持ってきてくれ」と話し、筆者にもパスポートを持参するように伝えられた。解散後、トライアウトを通して内定した新規メンバーの選手は皆、笑顔でハグや握手を交わし合い、喜びのダンスを踊っている者もいた。次の日、20 歳以下のルサカ地域の選手で構成された選抜チームとのトレーニングマッチがあると、当日監督からチームに知らされた。試合の準備をグラウンド脇で進めていた筆者をチームマネージャーが呼び止め、初対面のチーム関係者 2 名と計 4 人で話しがしたいと切り出した。筆者とは初対面の 2 名のザンビア人のチーム関係者（officials）は、険しい表情で”What is your real purpose to play football in our country?”（君がザンビアでサッカーをしている本当の目的はなんだ）と訪ねた。「アフリカのプロサッカーに挑戦してみたいんだ」という筆者の答えに対してもう一人の役人が”We want to know your ACTUAL purpose. Otherwise we cannot let you join the team because we know that Chinese always have business background.”（我々は君の真の目的を知りたいのだ。中国人はいつもビジネスの背景があるのは知っているから、正直に言わないとこのチームでプレーすることはできない）と腕を組みながら詰問してきた。筆者は持参するよう指示されていたパスポートをリュックから取り出し、日本国籍であることを伝えた。しかし”It’s that same for us. We cannot accept players who look like Chinese. Please find a different team.”（我々にとっては同じことだ。中国人みたいな選手は受け入れることはできない。違うチームを探してくれ）と一方的に断られ、関係者 2 人は車に乗り去って行った。その日のトレーニングマッチに筆者は出場する機会を与えられず、試合後現場のスタッフが座っていたベンチに行くと、”Sorry Jindo, we loved how you play and we pushed to sign you at the meeting with the officials but it didn’t work out. It is hard for teams in Zambia, especially a team like us, to sign players like you since we cannot differentiate Japanese and Chinese. Please understand.”（仁道、すまない。我々コーチ陣は君のプレーが大好きで幹部との会議で君と契約を結ぶよう頑張ったのだが難しかった。日本人と中国人は見分けがつかないため、特にこのようなクラブは君みたいな選手と契約するのが難しいんだ。理解してくれ。）と監督は落ち着いたトーンと暗い表情で話した。筆者は次の日からプレーできる違うチームを探すため、そのチームを去った。

(3) ザンビア人と「アジア人」

筆者が住んでいた家から練習場まで、徒歩で1時間かかった。普段は同居人のチームメイト5人と徒歩で練習場へ向かっていたのだが、4月16日は、筆者は練習行く前に道中にあるスーパーマーケットで買い物をするためタクシーを使った。その際、スペースがあったので希望者を募り、同居人のチームメイト3人も同乗した。そのうちの一人はチームで最も年上(33歳)のベテランザンビア人選手H。残りの二人はザンビア人E(25歳)とナイジェリア人I(20歳)であった。

練習場に到着し、タクシーの運転手が練習の様子を最後まで見学していた。そのため帰りも同じタクシーで帰ることになり、筆者と自主練習をしていたチームメイト3人(EとIとザンビア人選手J)を誘って帰宅した。その際Hは先に他のチームメイトと練習場を出発していたため徒歩で帰宅しているところをタクシーが追い抜いた。15分ほど遅れて帰宅したHは筆者が同居人全員のために購入した飲み物を受け取ることなく、無視しながら自分の部屋に直行した。当日の料理当番だった筆者は昼食を作り、同居人にそれぞれ配膳した。通常は玄関の階段に腰掛け、全員が揃って食事をするのだが、Hだけ部屋から出てくる気配がなかった。Hとルームメイトのもう一人のベテランザンビア人選手K(33歳)が「帰りのタクシーに乗れなかったことであいつは自分だけが仲間はずれにされたと思って怒っている」と話した。筆者は飲み物と昼食をHの部屋の前へ置き、「帰りのタクシーに誘わなくて申し訳ない。タクシーを帰りも使うことは練習後に決まったんだ。決して意図的にHを帰りのメンバーから外したわけではないんだ。許してくれ。ここに飲み物と昼食を置いとくから」とドア越しに話すとHはドアを開け、“I hate to be embarrassed in front of my people. I know what you Asians are trying to do. You might be rich enough to buy our country with money, but you will never be able to buy our heart and pride! I will never receive what you have bought!”(俺はみんなの前で恥をかかせれることが1番嫌いなんだ。

おれはお前らアジア人がなにをしようとしているか知っているからな。お前らは我々の国を買えるだけの金はあるかもしれないが、我々のハートとプライドは絶対買えないからな！お前が買ったものなんか食うか！)と鬼のような形相で声を荒げながら昼食が入っている皿をひっくり返した。

第5章 結論

本章ではまず第4章で記述した事例をザンビアの歴史や現代政治の観点から考察し、それに共通する感情に注目しながらザンビア人の文化を明らかにする。最後に本研究の課題と今後の展望を記し、本稿の結論とする。

1. 考察

第4章に記述した、筆者がザンビアのプロサッカーを通して経験した事例は「宗教観」と「人種観」というテーマに分けることができる。まず、それぞれの事象が起こる背景を第2章と第3章で整理したザンビアの歴史と政治的な観点から検討し、そこから観察できるザンビア人の性格および価値観を構成している感情を考察する。

ザンビアを含めたアフリカ全土で、生活のなかで自然に生まれ、はぐくまれてきた世界観が伝統民族の文化とりわけ、伝統宗教には存在する。その中でも呪術は、「超自然的」な力を利用して人々に影響を及ぼすと古くからアフリカの人々は信じてきた。

入植の過程でサッカーが宗主国のイギリスからもたらされ、キリスト教の布教とともにザンビアに急激に広まった。20世紀中頃、アフリカ諸国が次々と植民地支配から独立していき、アフリカの国際的な立ち位置が確立された。まもなくしてアフリカサッカー連盟とザンビアサッカー協会が設立し、ザンビアにもプロサッカーリーグが発足した。これはサッカーにおけるザンビアの近代化なのである。西欧諸国からプロサッカーリーグといういわば西欧近代的組織が形式として土着したものの、そこにはアフリカ特有の文化が根強く残っている。そのうちの1つが、第4章であげた「宗教観に関する事例」のような伝統宗教である。また第3章で述べたように伝統宗教だけでなく、キリスト教との密接な関わりもあることから、ザンビアのプロサッカー文化には様々な宗教観が混在していることがわかる。

筆者はザンビア以外でも複数のアフリカ諸国のプロサッカーを経験したが、ザンビアは特に普段のトレーニングから自らのミスを他人に擦りつける傾向にあると感じている。「誰かが黒魔術を使っているから試合に勝てない」というように、自らの過

ちを人や霊的なものの所為にする特徴から、ザンビア人は他責的で内省しない性格があると言える。

「人種観に関する事例」は「対中国人」と「対白人」に分類して考えることができる。

第2章で示したように、20世紀後半からザンビアはアフリカ諸国の中では中国から圧倒的な規模の経済支援を今日まで受け、経済的に成長している。しかしこれは依存につながり、中国が政治的主導権を持つ関係を作り出しかねない。近年のニュース報道や政治家の発言からもザンビア人の反中感情の高まりが観察できる。事例(2)の”(中略)we know that Chinese always have business background.”、「チャイニーズは我々がサッカーをするチャンスまで奪うのか。国へ帰れ！」や、事例(3)の”You might be rich enough to buy our country with money, but you will never be able to buy our heart and pride!”という発言からも中国の政策に対する不安感情や怒りが、外見が類似しているアジア人という括りにまで広がっていることがわかる。

事例(1)の”You think you know more football than us because you are Mzungu?!”という発言から「白人」に対する黒人としての劣等感が見受けられる。友尻によると、対人関係において、防衛的な態度が比較的取られやすいなどの情緒的に不安定な性格は劣等感の補償作用である[友尻 2011:222]。またチームミーティングの間でも数回監督は筆者を引き合いに出し、「白人の仁道がアフリカでサッカーをしているんだ。黒人の我々がもっと頑張らなくてどうする」と白人優位的な発言をしていた。

ザンビアはヨーロッパ諸国による100年を超える支配から1964年に独立した。入植の過程で、ヨーロッパ人は「『独自の歴史をもたない暗黒大陸、啓蒙し文明化すべき更新的な人々』という人種差別的なアフリカ観を生み出すとともに、自らによるのちの植民地支配を『進歩のないアフリカ』を救う者として正当化し、この大陸を都合よく開発・利用」[上田 2017:7]してきた。さらに、上田は「キリスト教の布教活動は、ヨーロッパ人によるアフリカ植民地化を『道徳的・技術的に勝る自ら』による慈善的な企てであるとする信念を生み出す」[上田 2017:7]ことになったと主張し、この先入観的な優劣関係が現在のザンビア人の考え方に内面化されているのである。

両テーマに共通するのは、ザンビア人は自分たちより社会的立場の高い人の存在を大切にする、従属的な性格であるということである。カエベタはザンビアに年長者を

敬う文化が根強く残っているのは、地方の農村部で地域の長老（chief）が政治的にも権力を握っている背景が影響している⁽¹⁷⁾ [カエベタ 2015]と分析する。

監督 D は B が怪我を繰り返し、十分に平日のトレーニングに参加できていないにも関わらず、公式戦の先発メンバーとして起用され続けた。選手起用法が自らの生活にかかっている、プロスポーツの文脈で考えたとき、追放された B 以外に監督 D も非難の対象になってもおかしくはない。しかし、選手はシーズンを通して伝える機会が何度もあったにもかかわらず、監督やコーチ陣に選手起用について直接不満を口にすることはなかった。またピッチ内外では常に年上の選手を敬い、ベテラン選手に反抗的な態度をとる選手は一人もいなかった。これは監督やコーチ陣とクラブオーナーとの関係性でも同様のことがいえ、彼らの給料が3か月以上延滞したり、彼らのサッカーコーチングに対して過干渉しても、すべて受け入れていた。

加えて、ザンビア人は世間体を非常に大切にせる性格である。その証拠に多くのザンビア人は家の庭を丁寧に管理したり、髪型やファッションに気を使う。故障して正しい時間を表示していなくとも腕時計を見栄えのために身につけるザンビア人は少なくない。さらには SNS(特に Facebook)の最終学歴や就職先のステータスを虚飾しているケースがしばしば見受けられる。自分たちが周囲にどう見られているか、という他者の視点を意識し、自分が理想とする表面的な自己イメージを保とうとする特徴がある。

以上の性格と事例を「恥と罪悪感の自己制御機能モデル」⁽¹⁸⁾ [隈、三浦 2014]に当てはめて分析する(図 11)。ザンビア人は他責的で内省しない、つまり喚起要因として「私的自己」への帰属をしない。つまり出来事に対しての喚起要因は「他者への帰属」もしくは「公的自己への帰属」となり、それぞれ「屈辱感」と「羞恥感」つまり「恥」が発生するのである。すなわち、ザンビア人の行動の動機付けとなっている感情は「恥」だということがわかる。

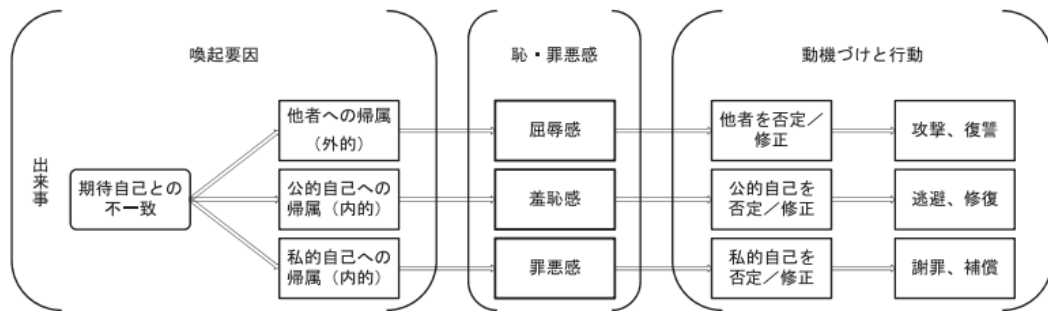


図 11 「恥と罪悪感の自己制御機能モデル」

[隈、三浦 2014:16-17]より引用

最後に改めて「恥」という感情に注目して事例を解釈してみる。

事例(1)は、従属的なザンビア人選手の面前、つまりコーチといういわば組織内における立場が上の人に対しては意見できない文化の中で、一選手に指摘を受けたことに対しての「恥」の意識が表出された言動だったのである。事例(2)は、国として中国との接し方に敏感になっている状況下、ザンビア議会という立場で、「中国人（みたいな）選手を受け入れたクラブ」として周囲に見られることが「恥」なのである。事例(3)で H は“You’ve embarrassed me in front of my people.”と述べているように、周囲に「自分は仲間はずれにされている」というマイナスのイメージを持たれることに「恥」を感じたことが原因である。

「宗教観に関する事例」では、人々が論理的に説明できない超自然的な「呪術」を持ち出すことで、ハードワークしたにも関わらず、期待していた結果が得られなかったという「失敗」から感じる「恥」を払拭していたのだ。従属的な性格の根本にあるのも、社会的な立場が高い人に「恥をかかせてはいけない」という強い感情意識であり、彼らに問題の原因があっても矛先を向けることができないのだ。そして不平や不満で蓄積したやり場のない感情を、「呪術」に帰属することで、皆が納得せざるを得ない状況を作り、組織の平穏を保とうとしたのだ。

佐々木は超自然的力を行使する目的に「社会統制や秩序の維持」があるとし、「通常の間人とは違った『別格な存在』」がこのような力を行使することが重要であると述べている[佐々木 1995:50]。この事例でも同様に、牧師という「崇高な存在」

をチームに招き、「聖なる油」を垂らすことで集団の「恥」を解消し、組織統制や秩序の維持の役割を果たしていたと考えることができる。

「超自然的」な観念が持ち出されるときには、その社会の中心的な価値観が表出する[梅屋 2012:70-71]と考えられており、以上に記述したように、ザンビア社会の中心的な価値観の1つに「恥」という感情があると考ええる。

2. 課題と今後の展望

本稿はアフリカ、とりわけザンビアのプロサッカーの実態を筆者の経験的データと該当国の歴史的背景を中心に照らし合わせることで明らかにした。そこには、伝統的に存在する宗教と宗主国によってもたらされたキリスト教の文化が混在しているのである。また入植の歴史および現代の政治的背景がザンビア人の言動に影響していることも理解できた。さらに事例で浮き彫りになったザンビア人の性格に共通する価値観的な感情は「恥」であることが推測できた。しかし本研究では、これは仮説レベルにとどまる。これを立証し、サッカーを通してザンビア以外のアフリカ諸国の文化も明らかにすることを今後の展望とする。

参考文献

阿部年晴

- 1989 『アフリカを知る事典』伊谷純一郎・小田栄郎・川田順造・田中二郎・米山俊直監修 pp.200-202、平凡社。

イアン・ホーキー

- 2010 『アフリカ・サッカー：歓喜と苦悩の 50 年』 pp.282-283、実業之日本社。

上田元

- 2017 「総説」島田周平・上田元編『世界地誌シリーズ アフリカ』8:7、朝倉書店。

植竹涉

- 2017 「スポーツを通じた開発の有効性の再考ーアンゴラにおける事例を通してー」『筑波大学社会・国際学群国際総合学類卒業論文』p.27。

梅屋潔

- 2012 「アフリカのある村における死霊の観念と施術師，そして呪い歌 ―続・私と「地域」とのおつきあい―」『神戸大学大学院国際文化学研究科 地域構想学研究教育報告』2:70。
- 2017 「「見えない世界」と交渉する作法ーアフリカのウィッチクラフトと、フランス・B・ニャムンジョの思想」『思想』1120:86-98、岩波書店。

小倉充夫

- 1995 『労働移動と社会変動ーザンビアの人々の営みから』pp. 63-78、129-143、有信堂。

金七紀男

2003 『ポルトガル史（増補版）』 p.190、彩流社。

隈香央里、三浦麻子

2014 「恥・罪悪感の喚起要因と喚起後の行動に関する実験的研究：囚人のジレンマを用いて」『関西学院大学心理科学研究』40:7-18。

Garcia, D.

2018 「不安定に耐えるか、外国へ逃げるかーアフリカの悲慘なサッカー事情ー」清田智代訳、
<https://www.monde-diplomatique.fr/2018/07/GARCIA/58827> より(2020/01/14 参照)。
(David Gracia, 2018, Misère du football africain. Le Monde diplomatique.).

佐々木重洋

1995 「「呪薬の神」としての仮面ーカメルーン南西部、エジヤガム族のオバシ
ンジョムについてー」『アフリカ研究』46:35-53。

Chen, W., D. Dollar, and H. Tang

2015 *Why is China investing in Africa? Evidence from the firm level. Brookings Institution.*
<https://www.brookings.edu/wp-content/uploads/2016/06/Why-is-China-investing-in-Africa.pdf>

友尻奈緒美

2011 「劣等感とその補償について：質問紙とTATを用いた調査より」『京都大学大学院教育学研究科紀要』57: 211-224。

Blaikie, W. G.

- 1880 *The Personal Life of David Livingstone*. The Personal Life of David Livingstone: Chiefly from his Unpublished Journals and Correspondence in the Possession of His Family. Project Gutenberg.

星昭、林晃史

- 1988 『アフリカ現代史 I—総説・南部アフリカ』 pp.99-109、123-157、197-238、山川出版社。

吉田 栄一

- 2010 『アフリカレポート』日本貿易振興機構アジア経済研究所。
2017 「グローバル化とフォーマル経済」島田周平・上田元編『世界地誌シリーズ アフリカ』8:120-129、朝倉書店。

米山俊直

- 1989 『アフリカを知る事典』伊谷純一郎・小田栄郎・川田順造・田中二郎・米山俊直監修 pp.199-200、平凡社。

注

- (1) IMF World Economic Outlook 2017 April「世界で最も経済成長率の高い 10 カ国」国別データより。
- (2) アフリカ開発会議とは国際連合や世界銀行などとの共催で日本が主導して 1993 年以来 5 年ごとに開催しているアフリカをテーマに議論する国際会議である。2019 年 8 月 28 日から 30 日にかけて日本の横浜で第 7 回アフリカ開発会議が開かれ、アフリカ 54 か国のうち 53 か国が参加した。
- (3) IMF World Economic Outlook 2017 April「地域別経済成長率見通し」国別データより。
- (4) 2010 Census of Population National Analytical Report (2020/01/14 参照)より。
- (5) 「データブック オブ・ザ・ワールド 2016 年版 世界各国要覧と最新統計」p277 二宮書店 平成 28 年 1 月 10 日発行 (2020/01/14 参照)より。
- (6) Livingstone Tourism Association HP <http://www.livingstonetourism.com/> (2020/01/14 参照)より。
- (7) AFPBB News「ザンビア大統領選、与党バンダ氏が当選 2008 年 11 月 2 日」https://www.afpbb.com/articles/-/2534619?cx_part=search (2020/01/14 参照)より。
- (8) AFPBB News「ザンビア暫定大統領にスコット氏、アフリカで 20 年ぶり白人元首 2014 年 10 月 30 日」https://www.afpbb.com/articles/-/3030352?cx_part=search (2020/01/14 参照)より。
- (9) CIA World Factbook HP <https://www.cia.gov/library/publications/the-world-factbook/geos/za.html> (2020/01/14 参照)より。
- (10) NPR HP <https://www.npr.org/templates/story/story.php?storyId=127600200> (2020/01/14 参照)より。

- (11) 一色出版ホームページ https://www.isshikipub.co.jp/web-book_sports_14africa/ (2020/01/14 参照) より。
- (12) Football Knowledge HP <https://www.football-knowledge.com/history-of-football-in-africa/> (2020/01/14 参照) より。
- (13) Exploring Africa HP <http://exploringafrica.matrix.msu.edu/football-soccer-in-africa/> (2020/01/14 参照) より。
- (14) 国際サッカー連盟ホームページ <https://www.fifa.com/associations/> (2020/01/14 参照) より。
- (15) ニュース配信サイト TOCANA
https://tocana.jp/2018/06/post_17281_entry.html (2020/01/14 参照) より。
- (16) FC MUZA で選手は 5～8 人 1 組で住居が割り当てられる。筆者のルームメイトはザンビア人 E(25 歳)で、その他の同じハウスに暮らしているのはザンビア人 H(33 歳)、ナイジェリア人 I(20 歳)、ザンビア人選手 K(33 歳)である。
- (17) Child Research Net「第 9 回 子どもを取り巻く環境-大人との接点-」
<https://www.blog.crn.or.jp/report/09/180.html>(2020/01/10 参照) より。
- (18) 「恥と罪悪感の自己制御機能モデルとは、恥と罪悪感が喚起される要因とその後の動機づけと行動を一連のプロセスとして予測するモデル」である。「まず、恥（屈辱感と羞恥感）と罪悪感、他者を基準とする期待自己との不一致として出来事を認識することで喚起される。さらに、不一致の原因 について、他者への帰属（外的帰属）がなされた場合は屈辱感が喚起され、攻撃や復讐といった他者を否定／修正する行動を動機づける。公的自己への帰属（内的帰属）がなされた場合は羞恥感が喚起され、逃避や修復といった公的自己を否定／修正する行動が動機づけられる。私的自己への帰属（内的帰属）がなされた場合は罪 悪感が喚起され、謝罪や補償といった私的自己を否定／修正する行動が動機づけられる。これら一連のプロセスを恥と罪悪感の自己制御機能とする。」[隈、三浦 2014:16-17]

Summary

Sport and Regional Culture

-Based on cases of professional football in Zambia-

This thesis is written based on the personal experiences of the author while staying in Zambia from October 2018 to June 2019. The author experienced interesting cases such as discrimination against “Chinese” and “Mzungu (a white person)” and traditional local religion such as “juju” in the context of professional football. In order to clarify the cause of the above cases, which were classified into the points of view of “religion” and “race,” the author compared them with the historical and political background of Zambia.

The purpose of this thesis is to provide two perspectives about the country: First, the condition of the Zambia Super League, the top division in Zambian professional football, and second, a discussion of the emotional value of Zambians. Analyzing the cases through the framework of the “autogenous regulation function model of embarrassment and guilt” presented by [Kuma and Miura 2014], the author concludes that the emotional value of Zambians is “embarrassment.”

謝辞

本稿の執筆にあたり、非常に多くの方のお力添えをいただいた。この場を借り、感謝の意を示したい。まず、本稿の執筆に際して多くの助言とご指摘をいただいた関根久雄教授には心よりお礼を申し上げたい。関根先生には本稿の執筆以外にも、3年間ゼミ生として大変お世話になった。途上国開発を人類学視点から考察する上で必要な視点や知識をご教授いただいた。部活動のため、たびたびゼミ活動を早退・欠席したり、1年間休学してアフリカで活動したりしていた私にも深い愛情で見守っていた。

また、本稿のデータにもなっているアフリカでの経験は多くの方々の支えがあったことである。私のアフリカ留学の実現に協力していただいた方々にお礼を申し上げたい。

さらには、ゼミ生をはじめとする大学内の先輩、同期、後輩に感謝したい。本稿の執筆で悩んでいるときに、食事に付き合ってくれて快く相談に乗ってくれた。また、他愛もない話をしたり、時には一緒にはしゃいだりしてくれたお陰で日ごろ抱えていた不安や悩みを解消することができた。本当にありがとう。

そして、ここまで育ててくれた親に感謝の意を表したい。私を焦らせまいと、執筆のことには一切触れずに、日々の楽しい出来事や家族の様子を写真に撮り、共有してくれた。その1つ1つが私にとっては癒しであり、心の支えとなっていた。そのような静かな優しさに感謝したい。ありがとう。

最後に改めて、執筆に関わってくださった皆様に感謝と敬意の意を表して、本稿の結びとさせていただきます。